

教 学 の 手 引 き

2011

人文総合科学インスティテュート  
学際プログラム

文学部



## Table of Contents

# 人文総合科学インスティテュート 学際プログラム

### I 人文総合科学インスティテュート 学際プログラム 教学紹介

#### 人文総合科学インスティテュート学際プログラム

|                 |   |
|-----------------|---|
| ① 教学理念・目標       | 3 |
| ② 履修の仕方について     | 3 |
| ③ 小集団教育科目       | 4 |
| ④ 外書講読          | 4 |
| ⑤ 講義科目          | 4 |
| ⑥ 卒業論文          | 5 |
| ⑦ テーマリサーチ型ゼミナール | 5 |
| ⑧ 履修モデルについて     | 5 |

#### 言語文化領域

|           |    |
|-----------|----|
| ① 教学理念・目標 | 9  |
| ② 小集団教育科目 | 9  |
| ③ 外書講読    | 10 |
| ④ 講義科目    | 10 |
| ⑤ 卒業論文    | 11 |

#### 芸術表象領域

|           |    |
|-----------|----|
| ① 教学理念・目標 | 12 |
| ② 小集団教育科目 | 12 |
| ③ 外書講読    | 13 |
| ④ 講義科目    | 13 |
| ⑤ 卒業論文    | 15 |

#### 歴史人類領域

|           |    |
|-----------|----|
| ① 教学理念・目標 | 16 |
| ② 小集団教育科目 | 16 |
| ③ 外書講読    | 17 |
| ④ 講義科目    | 17 |
| ⑤ 卒業論文    | 19 |

|        |    |
|--------|----|
| 研究入門の栞 | 20 |
|--------|----|

|        |    |
|--------|----|
| 卒業論文の栞 | 21 |
|--------|----|

## Ⅱ 科目一覧と履修方法

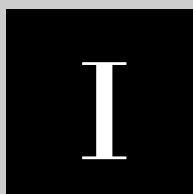
|              |    |
|--------------|----|
| ① 科目一覧 ..... | 30 |
| ② 履修方法 ..... | 31 |

### 「教学の手引き」の使い方

「教学の手引き」は、専攻・プログラムにおける皆さんの学びの指針となるものです。  
毎年配布される履修要項とあわせて、履修に役立ててください。

この「教学の手引き」は、皆さんが卒業するまで使用するものです。  
再配布はしませんので、大切に保管してください。

記載内容に変更・追加がある場合は文学部ホームページ（URL : [http://www.ritsumei.jp/lt/lt07\\_j.html](http://www.ritsumei.jp/lt/lt07_j.html)）や掲示で随時発表しますので、定期的に確認をしてください。



人文総合科学インスティテュート  
学際プログラム 教学紹介



# 人文総合科学インスティテュート 学際プログラム

## 1 教学理念・目標

「人文総合科学インスティテュート」は、近年の世界の変動と人文諸科学の多様化に呼応し、学生の新たな領域への関心に応えるために、認知科学、比較文学・比較文化、芸術表象論、現代アジア研究、文化人類学の5領域（2003年度入学生からは3領域：以下同じ）を中心に学際的な分野をカバーするものとして、96年度から文学部に開設されました。その狙いは他の10専攻と補い合いながら、旧来の専門性とは異なる人文科学の先端的で批判的な学際領域の開拓と教育をおこなうことにあります。

学際プログラムが掲げて具体的に養成する人材像はつぎのようなものです。

- 1) 基礎能力として、それぞれ言語文化あるいは芸術表象、歴史人類の各領域の知識を身につけている（学生それぞれが依って立つところの領域について、まず基礎的な知識を習得できるようにします。）
- 2) 世界で起こるさまざまな出来事について、上記の知識を援用しながら分析して考察することができる（各領域で得られた知識を現実起こっている出来事に応用して、分析と考察ができるようにします。）
- 3) 世界で起こるさまざまな出来事について、自主的に関心をもち、問題として取り上げていく能力を身につけている（さまざまな事象に関心をもち、それを学習の枠組みのなかにどのように取り込んでいくか、その応用能力を身につけます。）
- 4) 個々の専門領域を横断しながら学際的なアプローチと多角的な視点をもつ能力を身につけている（他の専門領域と連繋しながら、多角的に物事をとらえる能力を身につけます。）
- 5) 一見すると関係のないような出来事でも、多角的なアプローチによってそれらを組み合わせることで問題を解決する能力を身につけている（さまざまな事象が組み合わさった状態でも、視点を変えたり多角的にアプローチしたりすることで、問題を解決する糸口が見つけられるような方法を学びます。）
- 6) 分析また考察した結果を、口頭ないし文章によって論理的に表現することができる能力を身につけている（口頭もしくは文章によって、自分の考えを論理的に整えて発表できるようにします。）

## 2 履修の仕方について

上記の教育目標を実現するために、またそれぞれの学生個人の関心と目的を生かすために、人文総合科学インスティテュートの専門科目をどのように選択して組み合わせるかということについては後に履修モデルに即して説明しますので、ここではまずその全体の構成を示します。末尾の履修モデルも参照してください。

一般的に科目には、通年で開講されているものと前期ないし後期だけ開講される半期のもの、また夏期集中講義のように一定期間にだけ開講されるものがあります。1回生時には、インスティテュート学際プログラム教学の幹ともいえる、小集団でおこなわれる「人文総合科学研究入門」が通年科目として設定されています。その他、インス各論科目としてたとえば各領域に、「比較文化講義Ⅰ・Ⅱ」「グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ」「パフォーミングアート論」「民族と文明の美術史」「文化人類学Ⅰ・Ⅱ」などの科目があります。これに「言語学Ⅰ・Ⅱ」や「映像と表現」「宗教学概論Ⅰ・Ⅱ」といったその他科目を併せて受講することで、各領域の知識とその他領域への認識が深まることになります。

2回生向けには、小集団で通年の「人文総合科学基礎講読」を筆頭として、やや専門性を高めた「文化と文化批判Ⅰ・Ⅱ」「オリент美術史」「人間と環境」などのインス各論科目が設置されています。その他科目との組み合わせによって徐々に専門的な知識を蓄積します。また学際プログラムでは、登録必修科目（かならず登録・受講しなければならない科目）として2回生時に「外書講読Ⅰ・Ⅱ」が配置され、外国語能力のいっそうの向上を目指しています。

3回生になると、登録必修科目として「人文総合科学演習Ⅰ」が配置され、小集団クラスでより専門的な分析や考察をおこなう能力を養います。また「外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではないものの、学際プログラムの教学目標からして、できる限り受講することが学生に求められます。3回生時のインス各論科目は、より専門的な学習に対応できるように、「比較文学論Ⅰ・Ⅱ」「芸術とメディア」「他者認識の歴史」など、立ち入った問題により迫ってい

くことを可能とする科目です。その他科目と併せて受講して、その結果として学際的なアプローチが可能となるように科目の構成がなされています。

4 回生では、大学での専門的な学習を集大成するために、「人文総合科学演習Ⅱ」および「卒業論文」が必修科目として配置されています。必要ならば、自己の専門研究を補うために、インス各論科目やその他科目を履修します。

### 3 小集団教育科目

インスティテュート学際プログラム教学の幹をなす小集団科目である「研究入門」「基礎講読」「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」について説明を加えておきましょう。「人文総合科学研究入門」では3つの領域に共通する視点と問題意識そして研究手法を、今日の激しく変動する世界をとらえるために必要な、人文科学における総合性とは何かという問いを念頭において学びます。

研究入門での基礎的な視点を獲得してから、2 回生では「人文総合科学基礎講読」で基礎的なテキストを読むことを通じて問題意識を深めます。この講読の授業では3 回生での学修へ向けて複数の領域への関心を広げ深めることを目的としています。3つの領域を有機的に組み合わせて、学生のひろい関心に応え、また一つの主題に複眼的な視点が獲得されるよう組み立てられています。各領域の担当者が「基礎講読」で何に主眼を置いて授業を進めるかについては、各領域での説明を見てください。

そして「演習Ⅰ、Ⅱ」では3、4 回生合同のゼミ形式で、卒業論文としてまとめることを目標に各自の問題を展開していきます。多様な問題意識にこえつつ、3、4 回生において関心を絞ると同時に総合性・学際性を追求するという目標を実現するために、領域の区別をこえて複数の演習への登録が認められます。したがって意欲ある学生は自分のテーマを複数の教員の指導で、複数の視点から深めることが可能になります。演習は各領域の担当者ばかりでなく、可能な範囲でインスティテュート学際プログラム以外の担当者にも開設してもらい多様性をもたせるよう工夫されています。したがって自分の帰属する領域の担当者のみ限定せず枠を広くとってよく考えて選択してください。

1、2 回生の間に、さまざまな機会を通じてどの教員の演習を選択するのが自分の関心にとってもっとも適切か、また一つの領域に限定せずに演習を選択するとすれば、どのような組み合わせでとるべきか、よく考えて2 回生の終わりの予備登録にそなえてください。より詳細な説明は予備登録の時におこないます。

### 4 外書講読

次に「外書講読」について説明します。2 回生、3 回生でおこなわれる外書講読は、単なる外国語の習得のための授業ではなく、それぞれの研究領域における海外での研究業績そして資料を、その原語で読み、考える機会をえるためにおこなわれます。考えるための素材を日本語の制約から解放し、外へ向かって広げるための第一歩が「外書講読」だと言えるでしょう。それゆえここでは外国語の読解能力の養成とともに、テキストに関連したさまざまな文献に関心を広げていくための訓練も重視します。そのため2 回生の「外書講読Ⅰ・Ⅱ」は登録必修科目として指定されています。また3 回生の「外書講読Ⅲ・Ⅳ」は今のところは登録必修ではありませんが、外国語は継続学習が大事な点を考慮して、必ず受講するように心がけて下さい。各自の関心と目的に沿って、いかなる外国語を学ぶべきか、熟考の上で選択して下さい。

ただ現実にはすでに習得している英語と、初修外国語とでは段階の差があるので、初修外国語の2 回生の外書講読では語学力の養成にかなり重点を置き、領域ごとの専門的な文献講読は主に3 回生の外書講読でおこなわれることとなります。各領域ごとの外書講読の教学目標は各領域での説明を見てください。特に「言語文化」領域ではその専門の性格上、特に外国語を重視しており、必修の心構えで習得することが望まれます。ただし他の領域でもそれは同様であることを明記しておきます。

### 5 講義科目

講義科目は基本的に概論科目（「人文総合科学各論」）と特殊講義からなっています。それぞれの科目の教学目標

は各領域の説明を見てください。学際プログラムでは、各領域1回生配当の講義科目「比較文化講義Ⅰ・Ⅱ」「民族と文明の美術史」「グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ」「文化人類学Ⅰ・Ⅱ」を“コア科目”として指定しています。これら諸科目は、学際プログラムでの学修を進める上での基礎的力量・知識を養う重要な科目と位置づけられていますので、低回生のときに早期受講するようにしてください。また、進級につれ、新たな問題に関心が広がった場合、当初の帰属領域のコア科目受講が必要になる場合があります。ですので、1回生時には上記の科目をできるだけ多く受講しておくことが望ましいと思われます。

## 6 卒業論文

4年間の大学生活の総決算ともいえる卒業論文の作成の指導は小集団科目「演習Ⅱ」「卒業論文」でおこなわれます。したがって4回生ゼミはひとつだけの場合はもちろん複数選択の場合も卒論作成のことを念頭において選んでください。卒論作成の詳細は『卒業論文の栞』で説明します。

## 7 テーマリサーチ型ゼミナール

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく、まったく新しい形態のゼミナールです。21世紀の「知」のグローバル化を目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践、実習のテーマなど、現代社会が人文学に求める革新的なテーマを設定します。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直しています。

3回生のゼミ選択の際には、卒業時（4回生）にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといった事を考え、ゼミを選択します。その際、専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選んでください。

テーマリサーチ型ゼミナールでどのようなテーマのゼミが開講されているのかはシラバスで確認をして頂きたいと思いますが、以下に2011年度、3回生ゼミのいくつかを記しますので是非参考にしてください。

例) 「説き方の表現と教育心理学」、「中国映画から現代中国の文化を考える」、「THEMES IN ASIAN STUDIES」

## 8 履修モデルについて

人文総合科学インスティテュート学際プログラムの専門科目の構成は編成表に示したとおりですが、これはまだ料理の名前がならんでいるだけのメニューのようなものです。そのなかから何を選んで実際に味わい身につけるかは、あなた自身自身の選択によって決まります。できるだけ拘束を減らしてそれぞれの学生の問題意識に即して自由に勉強の組み立てができるようにカリキュラムは配慮されています。ただ逆にその分だけ選択に迷ってしまうこともあります。「履修モデル」は、みなさんの選択と組み立ての具体的な手掛かりとして、こうした関心にはこのような科目選択が可能であるという実例を示すものです。これを参考に4年間の自分の勉強計画を組み立ててください。

各領域の説明の部分で、各2つの履修モデルが例としてあげてあります。いずれの領域も、比較的新しい学問分野として、いくつかの共通する特徴をあげることができるでしょう。すなわち新たな分野としての、既存分野への「批判」、「造形」あるいは視聴覚的な表象への関心と、さまざまな「表現」の試み、「テキスト」への新たな視点、そして現場あるいは「フィールド」の重視です。こうした4つの要素がそれぞれの領域の特徴を帯びて組み合わせられています。そのことに注意しながら科目の編成を検討してみてください。そしてこれらのモデルを参考に、4年間の勉強をうまく組み立ててください。

# 言語文化領域

## 履修モデル

| 科目区分        | 必修         | 登録必修    | モデル1<br>言語表現と批判力                            |   | モデル2<br>文化と交通者  |   |
|-------------|------------|---------|---|---|---|---|
|             |            |         | 学際プログラム各論科目                                 | その他科目   | 学際プログラム各論科目   | その他科目   |
| 1<br>回<br>生 | 研究入門       | リテラシー入門 | 比較文化講義Ⅰ<br>民族と文明の美術史<br>グローバルヒストリーⅠ         | 言語学Ⅰ(人文)<br>日本文学概論Ⅰ(日文)<br>英米文学概論Ⅰ(英米)<br>映像と表現(教養)                         | 比較文化講義Ⅰ<br>グローバルヒストリーⅠ<br>文化人類学Ⅰ  | 言語学Ⅰ(人文)<br>史学概論Ⅰ(人文)<br>宗教学概論Ⅰ(人文)                 |
|             |            |         | 比較文化講義Ⅱ<br>グローバルヒストリーⅡ<br>パフォーマンスアート論       | 言語学Ⅱ(人文)<br>日本文学概論Ⅱ(日文)<br>英米文学概論Ⅱ(英米)<br>ジェンダー論(教養)                        | 比較文化講義Ⅱ<br>グローバルヒストリーⅡ<br>文化人類学Ⅱ  | 言語学Ⅱ(人文)<br>史学概論Ⅱ(人文)<br>宗教学概論Ⅱ(人文)                 |
| 2<br>回<br>生 | 基礎         | 外書講読Ⅰ   | ヨーロッパ文化史Ⅰ<br>文化と文化批判Ⅰ<br>世界の言語(通年)<br>現代美術論 | ラテン語Ⅰ(人文)<br>神話学Ⅰ(人文)<br>民俗学Ⅰ(人文)<br>日本文学史Ⅰ・Ⅲ(日文)<br>英文学史Ⅰ(英米)<br>米文学史Ⅰ(英米) | ヨーロッパ文化史Ⅰ<br>文化と文化批判Ⅰ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅰ<br>社会思想史<br>人間と宗教                   | 神話学Ⅰ(人文)<br>民俗学Ⅰ(人文)<br>社会言語学Ⅰ(人文)<br>西洋史概説Ⅰ～Ⅴ(西史)  |
|             |            |         | 外書講読Ⅱ                                       | ヨーロッパ文化史Ⅱ<br>文化と文化批判Ⅱ<br>人間と環境<br>美学・芸術社会学                                  | ラテン語Ⅱ(人文)<br>神話学Ⅱ(人文)<br>民俗学Ⅱ(人文)<br>日本文学史Ⅱ・Ⅳ(日文)<br>英文学史Ⅱ(英米)<br>米文学史Ⅱ(英米) | ヨーロッパ文化史Ⅱ<br>文化と文化批判Ⅱ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅱ<br>人間と宗教    |
| 3<br>回<br>生 | 演習Ⅰ・外国文化講読 | 外書講読Ⅲ   | 比較文学論Ⅰ<br>ヨーロッパ文学史Ⅰ<br>芸術とメディア              | 日本語と文化Ⅰ(日文)<br>英米文学特殊講義(英米)   | ヨーロッパ文化史Ⅰ<br>ヨーロッパ文学史Ⅰ<br>芸術とメディア<br>歴史人類学の諸問題<br>他者認識の歴史<br>歴史認識・叙述の諸問題    | 西洋史特殊講義Ⅰ～Ⅷ(西史)                                      |
|             |            |         | 外書講読Ⅳ                                       | 比較文学論Ⅱ<br>ヨーロッパ文学史Ⅱ(Ⅲ)<br>民族と芸術<br>民族誌の諸問題<br>地域と移動                         | 日本語と文化Ⅱ(日文)<br>英米文学特殊講義(英米)   | ヨーロッパ文化史Ⅱ<br>ヨーロッパ文学史Ⅱ<br>民族と芸術<br>民族誌の諸問題<br>地域と移動 |
| 4<br>回<br>生 | 演習Ⅱ・卒論     |         |   |   |   |   |

※「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではありませんが、極力、受講するようにしてください。

※「外国文化講読」は2008年度以前入学生のみ登録必修です。

### モデル1 言語表現と批判力

ヨーロッパやそれ以外の地域の文学を、文字に書かれたものやそうでないものを含めて、様々な角度から比較、分析し、われわれにとって言語表現が何を残しうるのかを歴史的に考える。

### モデル2 文化と交通者

ヨーロッパ地域の諸文化を、ナショナルな枠組みにとらわれずに、周縁地域も視野に入れ、時間軸、空間軸を自由に組み合わせて、多元的視点から比較・考察し、枠にはまらない批判的視点の獲得をめざす。

\*講義科目は一部変更される可能性もあります。

\*学際プログラム全体の科目編成は科目一覧を見てください。

(教養：教養科目、人文：人文科学総合講座科目、哲・心・その他：各専攻科目)

## 芸術表象領域

### 履修モデル

| 科目区分        | 必修 | 登録必修       | モデル1<br>美術とデザイン |   | モデル2<br>音楽とパフォーマンス  |   |   |
|-------------|----|------------|-----------------|---|---|---|---|
|             |    |            | 学際プログラム各論科目     | その他科目   | 学際プログラム各論科目   | その他科目   |   |
| 1<br>回<br>生 |    | 研究入門       | リテラシー入門         | パフォーミングアート論<br>民族と文明の美術史<br>比較文化講義Ⅰ・Ⅱ<br>文化人類学Ⅰ・Ⅱ   | 美と芸術の論理（教養）<br>映像と表現（教養）<br>言語学Ⅰ・Ⅱ（人文）  | パフォーミングアート論<br>民族と文明の美術史<br>比較文化講義Ⅰ・Ⅱ<br>グローバル・ヒストリーⅠ・Ⅱ   | 美と芸術の論理（教養）<br>映像と表現（教養）<br>現代の科学技術（教養）   |
| 2<br>回<br>生 |    | 基礎         | 外書講読Ⅰ           | ヨーロッパの美術・デザイン<br>オリエント美術史<br>仏教美術史<br>日本絵画史<br>西洋近代美術史<br>現代美術論<br>ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ<br>人間と宗教     | メディア論（人文）<br>哲学史Ⅴ・Ⅵ（哲）<br>視覚芸術（人文）<br>色彩論（人文）<br>西洋史概説Ⅰ～Ⅴ（西史）<br>神話学Ⅰ・Ⅱ（人文）<br>キリスト教思想Ⅰ・Ⅱ（人文） | ヨーロッパの美術・デザイン<br>日本絵画史<br>西洋近代美術史<br>現代美術論<br>美学・芸術社会学<br>西洋音楽史<br>文化と文化批判Ⅰ・Ⅱ<br>社会思想史<br>人間と環境 | メディア論（人類）<br>哲学史Ⅴ・Ⅵ（哲）<br>視覚芸術（人文）<br>色彩論（人文）<br>西洋史概説Ⅰ～Ⅴ（西史）<br>神話学Ⅰ・Ⅱ（人文）<br>社会言語学Ⅰ・Ⅱ（人文） |
| 3<br>回<br>生 |    | 演習Ⅰ・外国文化講読 | 外書講読Ⅲ<br>外書講読Ⅳ  | 芸術とメディア<br>民族と芸術<br>京都の美術<br>ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ<br>比較文学論Ⅰ・Ⅱ<br>歴史認識・叙述の諸問題<br>歴史人類学の諸問題<br>民族誌の諸問題 |   | 芸術とメディア<br>音楽文化論<br>京都の美術<br>ジェンダー・ポリティクス<br>ジェンダーと文化<br>他者認識の歴史<br>史料が語る世界<br>フィールドワークⅠ・Ⅱ      |   |
| 4<br>回<br>生 |    | 演習・卒論      |                 |   |   |   |   |

※「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではありませんが、極力、受講するようにしてください。

※「外国文化講読」は2008年度以前入学生のみ登録必修です。

#### モデル1 美術とデザイン

古今東西の造形表現について幅広く学ぶ。基本となるのは美術史学、とくに西洋美術史の方法論だが、人類学などの隣接諸学の成果もとりいれながら広くデザインの観点でそれを包摂し、あるいは現代の芸術表現に見られる造形の危機も講じる。比較芸術学的観点から音楽・映画などにも考究が及ぶだろう。

#### モデル2 音楽とパフォーマンス

「No Music, No Life（音楽のない生活なんて）」の評言は今日、多くの現代人に妥当する。この現状に至る経緯の歴史的・社会的考究を中心に据えることになるが、個別にはクラシック／非クラシック系音楽にとどまらない、広くパフォーミング・アーツ全般をも射程に入れた研究が想定される。

\*講義科目は一部変更される可能性もあります。

\*学際プログラム全体の科目編成は科目一覧を見てください。

（教養：教養科目、人文：人文科学総合講座科目、哲・心・その他：各専攻科目）

# 歴史人類領域

## 履修モデル

| 科目区分        | 必修 | 登録必修        | モデル1<br>異文化と他者   |                                    | モデル2<br>アジアの争点  |  |
|-------------|----|-------------|--|------------------------------------|---|--|
|             |    |             | 学際プログラム各論科目  | その他科目                              | 学際プログラム各論科目   | その他科目  |
| 1<br>回<br>生 |    | 研究入門        | 比較文化講義Ⅰ<br>グローバルヒストリーⅠ<br>文化人類学Ⅰ                                 | 言語学Ⅰ（人文）<br>美と芸術の論理（教養）            | グローバル・ヒストリーⅠ<br>文化人類学Ⅰ                                  | 宗教学概論Ⅰ（人文）<br>現代の科学技術（教養）<br>現代の世界経済（教養）<br>国際化と法（教養）              |
|             |    |             | 比較文化講義Ⅱ<br>民族と文明の美術史<br>グローバルヒストリーⅡ<br>文化人類学Ⅱ                    | 言語学Ⅱ（人文）                           | グローバル・ヒストリーⅡ<br>文化人類学Ⅱ                                  | 宗教学概論Ⅱ（人文）<br>社会学入門（教養）<br>ジェンダー論（教養）<br>現代環境論（教養）<br>科学と技術の歴史（教養） |
| 2<br>回<br>生 |    | 基礎          | 文化と文化批判Ⅰ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅰ<br>西洋音楽史<br>エスニシティとネーションⅠ<br>社会構造と文化  | 神話学Ⅰ（人文）<br>民俗学Ⅰ（人文）<br>社会言語学Ⅰ（人文） | オリエント美術史<br>社会思想史<br>エスニシティとネーションⅠ<br>人間と宗教             | 社会学概論Ⅰ（人文）<br>民俗学Ⅰ（人文）   |
|             |    | 講読          | 文化と文化批判Ⅱ<br>文化とポストコロニアル批評Ⅱ<br>美学・芸術社会学<br>エスニシティとネーションⅡ<br>人間と環境 | 神話学Ⅱ（人文）<br>民俗学Ⅱ（人文）<br>社会言語学Ⅱ（人文） | 仏教美術史<br>エスニシティとネーションⅡ<br>近現代の諸相<br>アジアとテクノロジー<br>人間と環境 | 社会学概論Ⅱ（人文）<br>民俗学Ⅱ（人文）   |
| 3<br>回<br>生 |    | 演習Ⅰ・外国文化講読Ⅲ | 芸術とメディア<br>ジェンダー・ポリティクス<br>他者認識の歴史<br>民族誌の諸問題                    |                                    | ジェンダー・ポリティクス<br>地域と移動<br>歴史人類学の諸問題<br>歴史認識・叙述の諸問題       |  |
|             |    | 外書講読Ⅳ       | 音楽文化論<br>ジェンダーと文化<br>歴史認識・叙述の諸問題<br>地域と移動                        |                                    | ジェンダーと文化<br>都市と農村<br>民族誌の諸問題<br>史料が語る世界                 | 地域政策（人文）   |
| 4<br>回<br>生 |    | 演習・卒論       |  |                                    |   |  |

※「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」は登録必修ではありませんが、極力、受講するようにしてください。

※「外国文化講読」は2008年度以前入学生のみ登録必修です。

### モデル1 異文化と他者

ヨーロッパだけではなく、世界の様々な地域の文化の生成と交流、衝突の様態を比較し、分析する。その際、文化人類学や芸術表象の視点も視野に入れ、我々にとって異文化とは何か、他者とはいかなる意味をもつのか検討する。

### モデル2 アジアの争点

アジアの諸社会・文明にとってアクチュアルな争点（グローバリゼーション、国民国家とナショナリズム、エスニシティ、アジア諸地域の「文明化」過程、ヒトやモノの移動や交通、ジェンダー、技術、環境、植民地化）などを、自己の問題意識と関心のある地域に即して各自が選び取り、追求していく。

\*講義科目は一部変更される可能性もあります。

\*学際プログラム全体の科目編成は科目一覧を見てください。

（教養：教養科目、人文：人文科学総合講座科目、哲・心・その他：各専攻科目）

# 言語文化領域

## 1 教学理念・目標

21世紀を迎えた現代世界の歴史的展開は、19世紀以来の民族国家の枠組みとその中で形成された単一的な民族文化を越えて、いまや、異質な伝統をもつ諸文化がその独自性を保ちつつも互いに融合し、相互理解に基づいて共存する地球的統合と多元文化主義へと新しい動きと展開を見せはじめ、一方、アメリカの「超大国」のふるまいに世界が揺り動かされています。この歴史的趨勢の中にあつて、物心両面の人間の営みにおいて、国際的交流は必然化し、グローバルな感覚や視野の重要性はますます高っています。この歴史的転換期にあつて、たとえばヨーロッパでは、民族国家間のこれまで長年にわたった政治的確執や覇権競争と宗教的・文化的対立に終止符を打ち、ひとつのヨーロッパ理念の下で異質なものの共存を志向する政治的・経済的、そして文化的統合への道の模索が、日々、進められています。はたしてヨーロッパにおいて打ち出されたこの理想が、今後人類の歩むべき異文化共存のモデルとして、人類全体の未来を約束する普遍原理たりうるか否か、わたしたちはもう一度、ヨーロッパとは何かをふりかえりながら、考え直してみなければなりません。ヨーロッパに範をとりながら、結果として、地球上に多くの血を流してきた過去を背負うわたしたちは、自らの過去をふりかえることにも力を入れざるをえず、そうかといって、ヨーロッパの試みがいま踏み出そうとしている方向性からただ学ぶだけでは済まされない位置に立っています。つまり、学ぶべきところは正しく学びながら、ひとりひとりの地球像、わたしたち自身の未来のヴィジョンを立ち上げていかなければなりません。

言語文化領域が掲げて具体的に養成する人材像はつぎのようなものです。

- 1) ヨーロッパ地域の過去から現在に至る文化生成の過程を理解している（英語に偏らず、複数の欧米言語を習得することによって、これが可能となるように促します。）
- 2) 間口の広いヨーロッパ研究を通じて、ヨーロッパ文化の多様性を認識している（大きくドイツ語圏・フランス語圏・イタリア語文化圏という入口を設け、さらにこれをおぎなう形でスペイン語圏や北欧語圏など周辺文化にも配慮して考察ができる。）
- 3) 多様な文化が共存しうる世界を切り拓く新しい感性と知性を身につけている（古今東西の諸文化を横断的にあつかう講義によって、これが可能となるようにします。）
- 4) より踏み込んだヨーロッパとの交渉の可能性を自ら創造できる（単なるヨーロッパ礼讃に終わらず、より深くそれを知ることでヨーロッパの知性と互角に渡り合っただけの能力を身につけます。）
- 5) 一見すると関係のないような出来事でも、多角的なアプローチによってそれらを組み合わせて問題を解決する能力を身につけます（さまざまな事象が組み合わさった状態でも、視点を変えたり多角的にアプローチしたりすることで、問題を解決する糸口が見つけられる方法を学びます。）
- 6) 言語文化に関連した多様な課題を解決するための言語能力を身につけている（課題の解決のために十分な言語能力の習得を目指します。）
- 7) 分析また考察した結果を、口頭ないし文章によって論理的に表現することができる能力を身につけます。（口頭もしくは文章によって、自分の考えを論理的に整えて発表できるようにします。）

## 2 小集団教育科目

### 「人文総合科学研究入門」（コア科目）

今日の激しく変動する世界を捉えるために必要な、人文科学における総合性とは何かを念頭において、できるだけ広い視野を身につけます。また、各領域におけるそれぞれの視点と問題意識について認識を深め、その研究手法の基礎を修得し、いっそうの専門研究への道筋をつけます。

### 「人文総合科学基礎講読」(コア科目)

「研究入門」で修得した自主的な学習態度をもとに、基礎的なテキストを読みながら、各領域への関心を深めます。また、研究に通じる基礎的な読解力を養成するとともに、批判的な視点を養い、みずから研究課題を設定できるように知識の範囲を広げることを目的とします。

### 「人文総合科学演習Ⅰ」(コア科目)

多様な問題意識をもちながらも、自己の研究課題を明確に意識して関心を絞りながら、専門研究をおこないます。また、言語批評と芸術表象の結合や比較文化と人類学の結合など、学際的な研究を実行できるだけの問題意識を養成します。基礎的な読解力に支えられた批判精神を培い、動きつつある世界に対してどう対処すればよいのか、学生個人の認識を深めます。

### 「人文総合科学演習Ⅱ」(コア科目)

学際的な研究を総合的に進めていくために、いっそうの読解力を養成し、また自分の考えを論理的に表現できる技術を修得します。さらに、必要ならば実地調査など屋外での資料収集もおこない、そのスキルを修得します。

## 3 外書講読

### 「人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ」

語学力の養成に重点を置きながら、それぞれの領域における海外での研究業績および資料をその言語で読み、考える機会を設けるためにおこないます。テキストに関連したそれ以外の各種文献に関心を広げていくための訓練をします。

### 「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」

考えるための素材を日本語の制約から解放し、外へ向かって関心を広げ、領域ごとに専門的な講読をおこないます。また、外国語能力の集大成のために、文法の知識および語彙能力の向上を図り、それによって外国文献に対する批判的な読解が可能になるようにします。

## 4 講義科目

### 「比較文化講義Ⅰ・Ⅱ」(コア科目)

人間の育んできたもの全体を指す文化は、当然ながら各地域でその様相を異にします。自分たちのものとは異なる文化を理解し、自分の文化を相対化することで、人間全体のありようや人間が育んできたものについて学習します。単なる文化の表層だけでなく、それを突き動かしてきた人間の根本的な営みとその原動力について考察します。

### 「ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ」

ヨーロッパにおける基層文化からはじめて、ヨーロッパとは何か、その文化の成り立ちはどこに依っているのかを歴史的に理解して考察します。多様性を示すヨーロッパの文化なり制度なりの根本を形成している観念に触れます。

### 「文化と文化批判Ⅰ・Ⅱ」

人間の育んできた物質的なものと精神的なもの全体を指す文化について、批判的に考察して分析を加えます。多様な現れ方をする文化のいくつかの切片を取り上げ、文化の諸相を理解し、批判的に考察できる能力を養います。あらゆる文化には、人間のもつさまざまな問いかけに対する答えが用意されており、その答えの根拠を理解します。

### 「文化とポストコロニアル批評Ⅰ・Ⅱ」

文化を考察するにあたって、その根底的な問題群を構成する帝国主義や植民地主義、あるいは人種主義などを批判的に分析して、領域横断的に考察を加えます。現在の世界に現れている歴史的様態にかかわる問題として帝国主義や植民地主義を理解します。

**「社会思想史」**

近代社会という枠組みを思想という観点から捉え、さまざまな思想や思潮がそれぞれの時代にどんな役割を担ったのか、その影響の及んだ範囲などを歴史的に理解します。

**「世界の言語」**

世界にあまたある言語のなかからいくつかを考察対象にして、人間の使用する言語の一般的な文法構造や語用、単語の意味などについて理解を深めます。人間の使用する言語の普遍性や特殊性、節約性や冗長性など相反する特徴との関わりのなかで言語を考察します。

**「比較文学論Ⅰ・Ⅱ」**

日本文学のみならず、広く考察対象を諸外国の文学にまで拡大して比較をおこない、それぞれの文学の特殊性を浮き彫りにします。文学作品の成立事情、その文化的背景、受容史なども考察して作品を取り巻く環境についても認識を深めます。

**「ヨーロッパ文学史Ⅰ～Ⅲ」**

ヨーロッパに地域を限定して、そこに登場するさまざまな文学作品について、文化や政治、社会との関係を踏まえながら解説します。各国の文学というやや狭い枠組みに捕らわれることなく、ひろく文学を文化事象とみなして歴史的に考察します。

**5 卒業論文**

小集団教育を軸とした自主的学習の総仕上げとして卒業論文があります。論文作成に必要な文献や資料などを適切に収集して取捨選択して応用できることを目指します。4年間の学問的研鑽の集大成として、自己の研究の成果を論文のかたちで表現できる能力、その際の適切な文章表現能力、的確に口頭でも自己の意見を表現できる能力などを養います。

# 芸術表象領域

## 1 教学理念・目標

「芸術表象」の領域は、芸術／表象の問題に取り組む知の実践、すなわち美術史・美学・芸術学・音楽学・表象文化論・比較文明論・哲学・思想・批評などを横断しながら、人間の表現と認識の問題を考えていく領域です。

20世紀は、かつてあらゆる意味で特権的な場にあった「芸術」という現象が、大衆文化や複製技法、あるいは秒進分歩するメディアの体制のなかに消費、解体されていった時代でした。一旦そこでは「芸術」のアウラは消滅したといわれ、現代ではさまざまな芸術家の試みの末に、芸術を行為しない芸術や、素材と交渉せずに概念を示すみの芸術など、否定的な提示によって芸術の生き残りをはかるような事態をみせています。しかしその一方でそうした芸術は、現代の生命科学や環境論、歴史の古層の純粹化、伝統の復活などと安易に結びつけられてしまい、再び「神聖さ」をもって祭り上げられる場合も少なくありません。そこでは芸術がもつ「表象」というのはたらきの複雑さや危うさに対する、現代人の忘却がしめされているといえます。

「芸術」は、かつて政治や宗教の権威に奉仕し、一方的に単一的な原理を社会に提供するという大役を課せられていた時代のものであっても、またその機能が失せた現代のものであっても、人間という存在の「限界」をあきらかにしながら、芸術／表象のゆたかな展開を開いていくものであることを、私たちはこの21世紀の冒頭に立って、新たに認識しなければならないでしょう。

芸術表象領域が掲げて具体的に養成する人材像はつぎのようなものです。

- 1) 太古から現代までの文明と民族の芸術を理解している（それぞれの民族が培ってきた芸術を歴史的な観点から俯瞰して理解することを目指します。）
- 2) 芸術／表象の生成・成立の困難さを歴史的問題として認識できる（芸術の生成の困難を現在のみで特化して考えるのではなく、歴史的な視点でも考察できること。）
- 3) 音楽やパフォーマンスアート、現代メディアを通じての表象の限界と可能性を理解している（現代のもっとも新しい問題を横断しながらその限界と可能性を探ります。）
- 4) 芸術の具体的な作品ないし表現を「伝統」「アイデンティティ」「ナショナリズム」などの視点から検証また解釈する方法論と実践を身につけます。
- 5) 近代・現代の芸術批評史を学び、自らが批評の実践者として記述して表現できる（芸術の具体的作品について論理的な批評ができるようにします。）
- 6) 分析また考察した結果を、口頭ないし文章によって論理的に表現することができる能力を身につけます。（口頭もしくは文章によって、自分の考えを論理的に整えて発表できるようにします。）

## 2 小集団教育科目

### 「人文総合科学研究入門」（コア科目）

今日の激しく変動する世界を捉えるために必要な、人文科学における総合性とは何かを念頭において、できるだけ広い視野を身につけます。また、各領域におけるそれぞれの視点と問題意識について認識を深め、その研究手法の基礎を修得し、いっそうの専門研究への道筋をつけます。

### 「人文総合科学基礎講読」（コア科目）

「研究入門」で修得した自主的な学習態度をもとに、基礎的なテキストを読みながら、各領域への関心を深めます。また、研究に通じる基礎的な読解力を養成するとともに、批判的な視点を養い、みずから研究課題を設定できるように知識の範囲を広げることを目的とします。

### 「人文総合科学演習Ⅰ」(コア科目)

多様な問題意識をもちながらも、自己の研究課題を明確に意識して関心を絞りながら、専門研究をおこないます。また、言語批評と芸術表象の結合や比較文化と人類学の結合など、学際的な研究を実行できるだけの問題意識を養成します。基礎的な読解力に支えられた批判精神を培い、動きつつある世界に対してどう対処すればよいのか、学生個人の認識を深めます。

### 「人文総合科学演習Ⅱ」(コア科目)

学際的な研究を総合的に進めていくために、いっそうの読解力を養成し、また自分の考えを論理的に表現できる技術を修得します。さらに、必要ならば実地調査など屋外での資料収集もおこない、そのスキルを修得します。

## 3 外書講読

### 「人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ」

語学力の養成に重点を置きながら、それぞれの領域における海外での研究業績および資料をその言語で読み、考える機会を設けるためにおこないます。テキストに関連したそれ以外の各種文献に関心を広げていくための訓練をします。

### 「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」

考えるための素材を日本語の制約から解放し、外へ向かって関心を広げ、領域ごとに専門的な講読をおこないます。また、外国語能力の集大成のために、文法の知識および語彙能力の向上を図り、それによって外国文献に対する批判的な読解が可能になるようにします。

## 4 講義科目

### 「民族と文明の美術史」(コア科目)

世界中の諸民族が育んできた芸術とくに美術を、文明との関連で考察を進め、それらを歴史的に整合させて理解します。美術の歴史的な歩みを踏まえて、一個の文明論として考察して分析を加えます。

### 「パフォーミングアート論」

現代においてさまざまな表現方法を見せるパフォーミングアートを考察して、その内因や表現技術、観衆との応答など、社会生活におけるアートの役割について認識を深めます。

### 「ヨーロッパの美術・デザイン」

ヨーロッパの諸地域に見られる美術作品や装飾美術、デザインを考察して、成立時期や地域の特殊性について理解を深めます。

### 「オリエント美術史」

アジアの各文化圏とその周辺地域における美術の諸相を、大枠で時間軸にそって概述します。広く東洋全体を射程に入れて、これら広範囲な空間に展開する造形表象に対し、時間や主題といった様々な条件設定による比較を通じて、影響関係の立体的な復元を目指します。

### 「仏教美術史」

規範と逸脱の双方を取り上げながら、また芸術作品の意味を社会のシステムと連動させながら仏教の「美」の形成にひそむ問題を考察します。さまざまな概念の成立過程とその効果とを考察して仏教美術のありようを多角的に思考します。

### 「日本絵画史」

日本における画家とその作品、絵画の成立とその時代の絵画の特質、後世に与えた影響などについて歴史的な流れを講義します。日本絵画の基礎知識を修得し、それを批評できる批判的な視点を養成します。

### 「西洋近代美術史」

中世末期以降の西洋美術について、時代順に地域ごとに考察をおこないます。それぞれの作品を取り上げて美術史の流れを把握して、西洋美術史の基礎知識を獲得します。

### 「現代美術論」

美術の表現様式がきわめて多様化した現代を考察します。社会や都市環境などに関係させながら美術作品を考察し、あわせてその理論的枠組みについて認識を深めます。

### 「美学・芸術社会学」

美学や芸術に見られる理想像、あるいは特定の価値観に結びついて語られる美術作品について、社会学的な手法を用いて考察します。

### 「西洋音楽史」

バロックやロマン主義、現代音楽など、西洋における多様な音楽表現およびその担い手、それぞれの関係や影響について歴史的に考察して、西洋音楽の基礎的知識を修得します。

### 「芸術とメディア」

絵画や彫刻、音楽といった諸芸術と情報伝達の機構であるメディアとの関わりを歴史的に理解して、また現代的な問題として考察します。

### 「民族と芸術」

民族学や文化人類学的視点からもろもろの芸術作品を考察して、世界のさまざまな民族が育んできた芸術性に触れ、その内容について理解を深めます。

### 「京都の美術」

狩野派や土佐派など、多くの画家たちが創造的な創作活動をおこなっていた京都画壇をはじめ、美術の領域で指導的な役割を果たしてきた京都を考察の中心に据えて、その役割と可能性、また限界について認識を深めます。

### 「音楽文化論」

文化の重要な一翼を担ってきた音楽を取り上げて、その社会における役割や機能、教育における役割などを考察します。音楽を専門的に考察しながらも、他の芸術領域との比較も視野に入れ、文化としての音楽のありようについて認識を深めます。

## 5 卒業論文

小集団教育を軸とした自主的学習の総仕上げとして卒業論文があります。論文作成に必要な文献や資料などを適切に収集して取捨選択して応用できることを目指します。4年間の学問的研鑽の集大成として、自己の研究の成果を論文のかたちで表現できる能力、その際の適切な文章表現能力、的確に口頭でも自己の意見を表現できる能力などを養います。

# 歴史人類領域

## 1 教学理念・目標

20世紀はしばしば「戦争の世紀」と呼ばれていました。しかし、そこでいう戦争はここ数十年のうちに大きな変容を遂げました。世界規模での核兵器の拡散によって国民と国家全体を巻き込む世界大戦が不可能になって以来、戦争はより微細な形態で日常に遍在するようになり、その主体も国民国家に限定されることはなくなってきました。とりわけ、経済のグローバリゼーションと「宗教的原理主義」と名づけられた現象に伴って、暴力の形態も「戦争」と「テロリズム」の差異を曖昧にし、あたかも国家と個人が鏡像関係にあるかのように、相似した形態の暴力を世界規模の広がりをもちつつ繰り広げようになってきました。

こうした変化の背後にあるのは、いうまでもなく社会・経済領域でのグローバリゼーションと、それに抗う各地域の文化形態との葛藤なわけですが、必ずしもそれは社会において表出するわけではなく、むしろ我々個人の身体の領域にまで浸透するようになってきています。とりわけ、ジェンダーをめぐる政治はグローバリゼーションによる普遍的人権概念の普及に伴い、伝統的なジェンダー・ロールを攪乱し、各社会に暮らす我々一人ひとりの同一性と差異に対して大きな影響を及ぼすようになってきました。

歴史人類領域が掲げて具体的に養成する人材像はつぎのようなものです。

- 1) 歴史学の基本的な資料分析方法および文化人類学の基本的な方法であるフィールドワークを修得している（現在から過去へ遡行する歴史学、および生まれつつある歴史の記述法としての文化人類学を学習します。）
- 2) 現代社会のラディカルな変化を理解している（とくに「エスニシティ」「宗教」「ジェンダー」といった、人間集団を生み出すと同時に、それを差異づけて時には鋭く対立させる装置を認識しているという意味です。）
- 3) 日本を含めたアジア世界にみられる多種多様な社会を認識している（生きた現実と理論との相互交換関係のなかでアジア社会を考察できている。）
- 4) 個々の人間の身体に刻まれた社会を考察し、現代社会の様々な問題を批判的に判断できる（社会一般だけを考えるのではなく、個々人に顕現している社会のあり方とその問題について考察して分析できる。）
- 5) 現代アジア諸地域の社会、文化、政治、経済について複眼的な視点を身につけている（アジアを一つの自立した世界として考えるのではなく、異質な諸力に貫かれつつ、他と接合された世界として捉えることができるようにします。）
- 6) 歴史人類に関わる各種のテーマを有機的に関連づけながら、それを論理的に表現することができる。
- 7) 分析また考察した結果を、口頭ないし文章によって論理的に表現することができる能力を身につけます。（口頭もしくは文章によって、自分の考えを論理的に整えて発表できるようにします。）

## 2 小集団教育科目

### 「人文総合科学研究入門」（コア科目）

今日の激しく変動する世界を捉えるために必要な、人文科学における総合性とは何かを念頭において、できるだけ広い視野を身につけます。また、各領域におけるそれぞれの視点と問題意識について認識を深め、その研究手法の基礎を修得し、いっそうの専門研究への道筋をつけます。

### 「人文総合科学基礎講読」（コア科目）

「研究入門」で修得した自主的な学習態度をもとに、基礎的なテキストを読みながら、各領域への関心を深めます。また、研究に通じる基礎的な読解力を養成するとともに、批判的な視点を養い、みずから研究課題を設定できるように知識の範囲を広げることを目的とします。

### 「人文総合科学演習Ⅰ」(コア科目)

多様な問題意識をもちながらも、自己の研究課題を明確に意識して関心を絞りながら、専門研究をおこないます。また、言語批評と芸術表象の結合や比較文化と人類学の結合など、学際的な研究を実行できるだけの問題意識を養成します。基礎的な読解力に支えられた批判精神を培い、動きつつある世界に対してどう対処すればよいのか、学生個人の認識を深めます。

### 「人文総合科学演習Ⅱ」(コア科目)

学際的な研究を総合的に進めていくために、いっそうの読解力を養成し、また自分の考えを論理的に表現できる技術を修得します。さらに、必要ならば実地調査など屋外での資料収集もおこない、そのスキルを修得します。

## 3 外書講読

### 「人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ」

語学力の養成に重点を置きながら、それぞれの領域における海外での研究業績および資料をその言語で読み、考える機会を設けるためにおこないます。テキストに関連したそれ以外の各種文献に関心を広げていくための訓練をします。

### 「人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ」

考えるための素材を日本語の制約から解放し、外へ向かって関心を広げ、領域ごとに専門的な講読をおこないます。また、外国語能力の集大成のために、文法の知識および語彙能力の向上を図り、それによって外国文献に対する批判的な読解が可能になるようにします。

## 4 講義科目

### 「グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ」(コア科目)

なぜ世界はこのようであるのか、世界の諸社会と諸文化はどのように統合されてきたのか、そしていつ、どこでこうした変化は生じたのか、という問題について批判的視点を提供します。グローバル化、植民化、技術化、文明化、そしてジェンダー分化の諸プロセスに焦点をあて、関連する諸問題を考察します。

### 「文化人類学Ⅰ・Ⅱ」(コア科目)

世界中に存在するさまざまな民族とその生活・文化様式について理解を深め、相互に比較することによって人間の営みに関する認識を深めます。文化人類学の基本的な専門用語について解説を加えます。

### 「近現代の諸相」

近現代に起こったさまざまな歴史的事象から数例を取り上げて、それを決して単線的に考察するのではなく、多角的視野をもって分析します。政治や社会、経済状況がそうした事件に与えた影響やその後の経緯、ひろく世界史上の位置づけなどについて理解を深めます。

### 「人間と宗教」

近代において発明された視覚技術がいかに宗教活動に変化をもたらしたのか、また、そうした変化と社会全体の变化との連動、さらに今日も続く宗教と政治との関連について、具体的に理解できるようにします。

### 「エスニシティとネーションⅠ・Ⅱ」

今日、民族と国家とはかならずしも平和的な関係にあるわけではなく、むしろ民族と国家との軋轢によって多くの紛争が出来ています。本講義では、民族紛争や宗教紛争といわれるものの具体例を取り上げて、その原因や指導者の果たした役割、解決の可能性について認識を深めます。

## 「社会構造と文化」

人間の生活が営まれている所では、小さな単位であっても必ず社会があり、その社会は必ず独特の構造を示しています。特定の社会構造によって多くの文化が規定され、と同時にそこでは独特の文化が生まれています。本講義では、特定の社会構造が文化をどう規定しているのか、その原因を探り、相互比較することで社会と文化双方について理解を深めます。

## 「アジアとテクノロジー」

アジア諸地域を対象を絞りながら、現代のテクノロジーが近代化や開発に伴ってどう応用され、移転されたかについて理解を深めます。テクノロジーのもたらしたアジア社会の変貌と方向性を探り、その将来の姿について認識を深めます。

## 「人間と環境」

人間を取り巻く環境を環境学の見地から考察します。ヨーロッパの環境利用とアフリカその他の地域における環境破壊が人間や社会にどのように影響しているのかについて認識を深めます。

## 「ジェンダー・ポリティクス」

ある特定の国ないし社会を考察対象として、そこでのジェンダーの様相について基礎的な知識を修得します。また、ジェンダーに関する政策を分析して、それが当該社会のどんな要請に基づくものなのか、またその効果と限界について認識を深めます。

## 「ジェンダーと文化」

それぞれの文化には、しばしばジェンダーにある特定の役割が与えられています。本講義では、いくつかの文化を取り上げて、それら文化の規定するジェンダーの役割を考察し、文化および社会生活での男女の役割について知識を得ます。

## 「歴史人類学の諸問題」

歴史上のさまざまな時点における民族問題を取り上げて、人類学的手法を用いて考察します。民族を取り巻く社会や政治経済あるいは法制といった個々の社会的枠組みと、それ自身の歴史をもつ民族との軋轢や葛藤について、歴史的な認識を深めます。

## 「地域と移動」

ヨーロッパから南米への移民、世界各地からアメリカへの移民など、人間の移動に伴って生じるあらゆる問題を考察します。人間が流出した地域の社会状況や流入した地域の民族問題、ジェンダー問題、経済問題などについて検討します。

## 「都市と農村」

都市と農村という二つの軸を中心として、この軸をめぐる多様な社会・経済問題について考察します。都市と農村との経済格差、出稼ぎの問題、農村部の人口流出と都市部への流入など、昔からありながら今日でもいまだ解決していない諸問題について検討します。考察対象は日本だけではなくありません。

## 「他者認識の歴史」

自分以外の「他者」をどう認識してそれに対処するかという問題は、人類が誕生して以来、つねにつきまとう問題でした。他者は自分にとって友人なのか敵なのか、文明人なのか未開人なのか、人間は歴史的にどのような態度を他者にとってきたのかを文化人類学や社会学の理論を援用して考察します。

## 「歴史認識・叙述の諸問題」

歴史書ないし歴史教科書の類は、時の政治権力に影響されて特定の価値観が入る場合があります。あるいはまた、同一の事象でも必ずそれぞれの立場によって歴史認識が異なり、それゆえ異なる叙述がなされる場合も多いのです。

本講義では、歴史認識の方法とその限界、叙述の信憑性などについて理解を深めます。

#### 「民族誌の諸問題」

民族に関する記述であるところの民族誌にまつわる諸問題を、現代のマスメディアが提供する情報とも対比させながら考察して、民族誌に対する認識を深めます。また、異文化ないし多民族についての自己イメージについて検討します。

#### 「フィールドワークⅠ・Ⅱ」

フィールドワークの基礎を理論と実践の両面から修得します。各自でフィールドワークのテーマと調査地を決めて、実地にそれをおこないます。定量データや定性データの収集法を修得し、実現可能な調査計画書を作成できるようにします。

#### 「史料が語る世界」

たんに書かれた文書だけが史料ではなく、歴史的に遺存するあらゆるものが史料となりえます。本講義では、多種多様な史料をもちいて、そこから何が読みとれるかを実地に体験して、史料のもつ価値とその限界について理解を深めます。

## 5 卒業論文

小集団教育を軸とした自主的学習の総仕上げとして卒業論文があります。論文作成に必要な文献や資料などを適切に収集して取捨選択して応用できることを目指します。4年間の学問的研鑽の集大成として、自己の研究の成果を論文のかたちで表現できる能力、その際の適切な文章表現能力、的確に口頭でも自己の意見を表現できる能力などを養います。

# 研究入門の栞

## I. 学際プログラムにおける研究入門

研究入門は、文学部に入学した新生が全員受講することになる、クラスを単位とした小集団科目です。人文総合科学インスティテュート学際プログラムでは、以下に説明する入門講義とプレゼンテーションを軸に、研究入門を運営していきます。

### (1) 入門講義

研究入門を構成するコンテンツ（内容）の第一は、入門講義です。

ここでは、3領域から選ばれた6名の教員が、前後期を通じて数時間ずつ全3クラスの講義を分担し（これにより6サイクルの講義が生まれる）、それぞれ自身の専攻する学問領域について概要を論じます。また、それぞれのサイクル終了時に、講義の内容をうけてレポートが課されます。

これらの講義は相互に無関係のものではなく、前後期の講義を通じて「解釈と翻訳」という共通テーマのもとに設定されており、それぞれテキスト、イメージ、フィールドという3つの素材をもとにアプローチを試みます。この3つのアプローチによる入門講義と課題の意義は、特定の学問領域や入学時に選んだ領域のみに固執することなく、学際プログラムとして共通の学びのスキルを獲得することにあります。

ですから、本入門講義は、3回生に進級する際に演習を確定するにあたって、重要な参考となりえます（入学時所属領域とは異なった領域に所属したい場合は、所定の手続きが必要です）。

### (2) プレゼンテーション

研究入門を構成する第二のコンテンツ（内容）は、受講者が主体的に行うプレゼンテーション（発表）です。研究入門においてプレゼンテーションを重視する意義というのは、以下の3点を受講生に実践、習得してもらうことにあります。

- ①グループワーク：プレゼンの準備および実施にあたって問われるのは、グループメンバー各人が発揮する主体性のみならず、相互に意見を調整し協調して、全体の構成をまとめあげ、プレゼンを成功させることです。
- ②表現のスキル：プレゼンを成功に導く鍵は、レジュメの作成法や、さまざまな発表支援ツールの使用法などを習得し、自らの研究成果を効率的かつわかりやすく伝えることです。
- ③相互的学びの場：プレゼンとは、発表する側とともに、聞く側の能動的な参加姿勢があってはじめて成功するものです。発表内容のポイントをついた質問や、そこから議論を展開させていくことを通じて、自己の学びへとフィールドバックされるのです。

## II. 研究入門スケジュール

研究入門の具体的な運営は、年度最初の授業で配布されるスケジュール表を参照してください。授業最初のガイダンスにおいて、入門講義とプレゼンテーションの具体的な運営方針が説明されます。

レポート課題の提出等については、清心館3Fの学際プログラム共同研究室が窓口となります。グループワーク作業時には、この共同研究室を積極的に活用してください。そこでは、助教またはTA（ティーチング・アシスタント）から、グループワークのアドバイス等を受けることができます。

# 卒業論文の栞

## 人文総合科学インスティテュート学際プログラム「卒業論文」の体裁について

|              |           | 言語文化、芸術表象、歴史人類の各領域  |
|--------------|-----------|---|
| 原稿用紙に手書きする場合 |           | A4判「立命館大学論文用紙」(縦長)  |
|              | 縦書・横書の指定  | 横書  |
|              | 枚数        | 400字原稿用紙換算で30枚以上、50枚程度を目途とする。上限はもうけない。  |
|              | その他の注意    | 黒または青のペンを使用すること。  |
| ワープロを使う場合    |           | A4判白紙 (縦長)  |
|              | 縦書・横書の指定  | 横書  |
|              | 文字数に関する指定 | 1行あたりの文字数：指定なし 1頁あたりの行数：ゼミ指導教員の指示に従うこと。   |
|              | 枚数等に関する指定 | 400字原稿用紙換算で30枚以上、50枚程度を目途とする。上限はもうけない。  |
|              | その他の注意    | 上下左右のマージンが2～3cm<br>1頁あたりの文字数が1,200～1,400字<br>文字は10または10.5ポイント程度の大きさで、明朝などの一般的フォントを使うこと。 |
| 表紙等に関する体裁    |           | ゼミ指導教員の指示に従うこと。   |
|              | 大きさ       | A4  |
|              | 綴じ辺       | 短辺綴じ(上辺綴じ)もしくは長辺綴じ(左辺綴じ)  |
|              | 題目シール     | 指定なし 表紙に題目、学生証番号、氏名を所定の方法で記入  |
| 部数           |           | 3部作成し、2部を提出する。(1部は本人手元保存)   |

卒業論文提出までの手続きについては履修要項の「『卒業論文』の提出について」を参照して下さい。

## テーマリサーチ型ゼミナールにおける卒業論文（卒論形式・非卒論形式）の提出について

テーマリサーチ型ゼミナールでは、従来のような卒業論文の提出（卒論形式）もありますが、クラスによっては、卒論形式に代えて、共同で制作物（成果物）を仕上げて提出する「非卒論形式」もあります。必ずクラス内で担当教員に、いずれかの形式なのかを確認してから作成してください。

### ◆体裁について

|             |           |   |
|-------------|-----------|---|
| 卒論形式で制作の場合  | 文書体裁      | 字数：12,000字以上20,000字以下<br>英文の場合：65ストローク×25行、A4用紙15枚以上30枚以下<br>ファイル形式・書式・用紙の大きさなど：クラス担当者の指示に従うこと。<br>必ず <b>2部</b> 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず <b>2部</b> 提出すること。  |
|             | 表紙等に関する体裁 | 題目、学生証番号、専攻、プログラム、氏名を必ず記載すること。  |
|             | その他の注意    | 学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類はこれに該当しない。  |
| 非卒論形式で制作の場合 | 文書・表紙体裁   | 体裁についてはクラス担当者の指示に従うこと。<br>必ず <b>2部</b> 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず <b>2部</b> 提出すること。   |
|             | その他の注意    | 1. 制作物（成果物）には題目、学生証番号、専攻・プログラム、氏名を必ず記載するか添付すること。また、審査教員シールを貼付すること（貼付箇所は自由）。<br>2. 制作物（成果物）とともに、4,000字以上の個人レポートを提出すること。<br>※制作物（成果物）と個人レポートの両方を提出して初めて「卒論提出」となる。<br>※個人レポートの表紙裏にも審査教員シールを貼付すること。<br>3. 口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮称）」を実施することがある。実施日については、担当教員の指示に従うこと。 |

◆上記の他の提出に関する諸注意は基本的に履修要項の「『卒業論文』の提出について」に従ってください。

## 目 次

## 卒業論文の提出について

## 1 体裁と手続き——最低限これだけはクリアしないと受理されません。

## 1-1 用紙／書式／分量（字数の制限）

## 1-2 構成——うち表紙、要約、目次、本文、注、参考文献、資料

## 1-3 綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）

## 1-4 題目の届け出

## 1-5 提出

## 1-6 口頭試問

コラム——「共同研究室より」

## 2 文献表記のきまり——少しカタチにこだわってみる。

## 2-1 各領域の注と文献表記

## 3 卒業論文を書く意味

## 1 体裁と手続き——最低限これだけはクリアしないと受理されません

この葉〔しおり〕は、卒業論文を執筆・提出しようとする学際プログラムのゼミ受講生のために、初歩的かつ不可欠な形式的条件を中心に整理した手引きです。

この第1節ではまず、「体裁」と「手続き」について説明します。

使用する用紙・書式・構成などに係る指定や、題目の届け出（10月）と最終提出（12月）に係る手続きは、これだけはクリアしないと卒業論文として受領されない必要最低条件ですから、いずれについても遺漏のないよう心がけてください。（体裁については、共同研究室にサンプルが用意されていますので、それを参考にしてください。）

## 1-1 用紙／書式／字数の制限

## 1-1-1 用紙

A4版の用紙の片面のみ、縦位置、横書きで使用することを基本とします。

論文のテーマが縦書きを要請する場合は、個別に指導教員の指導を受けてください。

## 1-1-2 書式

細かな書式は、手書きの場合（1-1-2-1）と、ワープロを使用する場合（1-1-2-2）で、以下のように異なりますが、いずれの場合も、各頁の下部に頁番号（全体中の一連番号）を付さねばなりません。

## 1-1-2-1 原稿用紙を使用する場合

400字詰め立命館大学論文用紙（生協で取り扱っている）に、黒もしくは青のペンをもちいて清書します。（鉛筆書きの場合は濃い字で書いたものの鮮明なコピーしか認められません。）

## 1-1-2-2 ワープロ・ソフトを使用する場合

上下左右ともに2～3cmの余白をとります。字の大きさは10あるいは10.5ポイント程度、フォントは（特別な理由がないかぎり）明朝などの一般的なものがのぞましいでしょう。これで1行の字数は35字～40字、頁の行数を30行程度とすれば、1枚あたりの字数が1000～1200字程度となります。これ以上でも以下でも推奨できません。

なお、感熱紙は変色のおそれがあるので、コピーをとったものを提出してください。

## 1-1-3 字数の制限

本文（注を含まない）の分量については、400字詰め原稿用紙換算で30枚以上という下限と、50枚程度という緩やかな上限を設けています。

ワープロを使用する場合も、400字詰め原稿用紙に換算してその字数制限を守る必要があります。それが守られていることの目安として、本文末に以下の記載を加えるようにしてください——すなわち、字

数のカウントが可能なワープロ・ソフトの場合はその表示された字数を、カウント機能のないワープロ・ソフトの場合は「1行の字数×行数＝空白も含めた合計字数」の計算式を、それぞれ最終行のカッコ（ ）内に記します。

なお、上限を超える量の執筆が見込まれるようなら、個別かつ事前に指導教員に相談してください。

## 1-2 構成

ファイルとして綴じられた論文（綴じ方は次項 [1-3] を参照）の中味は、

内表紙

要約

目次

本文

注

参考文献

付録・資料等

の順で構成されます。（後述しますが [1-3]、こうして構成され綴じられた同一の論文を3部作成しなければなりません。）

なお、これらのうち、第2節で詳論する「注」および「参考文献」以外の項にかんする注意事項は、以下のとおりです。

### 1-2-1 内表紙

ファイルのおもて表紙 [1-3-2] に準じるものを、内表紙として第1頁におきます。具体的には、

「2010年度文学部卒業論文」の表記

論文題目（副題がある場合は改行して記載）

学生証番号

氏名

が明記されている必要があります。

### 1-2-2 要約

400字詰め原稿用紙にして2枚程度の量で、論文の本文を要約します。

### 1-2-3 目次

本項で触れる要約から資料等にいたる項目に加え、本文については章（あるいは節）にいたるまでの構成も記して、それらすべての項目に、頁番号を記します。

### 1-2-4 本文

第1章、第2章、…と複数の章をもって構成し、論理的に論述を進める必要があります。

また、それら複数章による部分を本論とした枠の部分に「序」（あるいは「はじめに」と「結び」（あるいは「おわりに」）をおいて、それぞれに問題の所在や今後の展望を記すのもよいでしょう。

さらに本論も、章のみでなく、階層構造を意識した部・章・節の区分を設けることも可能ですし、ときに必要ですらあるでしょう。

いずれにしても、本文の構成は考察の内容と不可分の関係にあるものですから、教員の指導を受けながら慎重に決定することが重要です。

[1-2-5の項として扱われるべき「注」については、第2節に詳述]

[1-2-6の項として扱われるべき「参考文献」については、第2節に詳述]

### 1-2-7 図表・資料等

図表は、一連番号を付しそれぞれ簡潔なタイトルや説明もつけたうえで、本文中の参照している位置に貼り込むか、独立した頁にして本文中に綴じ込みます。単位などを忘れないことはもちろんですが、線も実線、鎖線、一点鎖線などを用い、多色による区別は避けるようにします（特別な理由がないかぎりモノクロで出力します）。

また、論文に添付される資料類がファイルに綴じるのに適さない量や大きさを有する場合は、前もって指導教員の指示を仰いでください。

## 1-3 綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）

以下の条件に沿ったサンプルを共同研究室に用意していますので、参考にしてください [この節のあ

とのコラムも参照]。

### 1-3-1 綴じ方

上の1-2の項の説明にそって構成された中味を、ファイル（生協で取り扱っている）で綴じます。この同一のものを3部作成します [1-5も参照]。ファイルについてはゼミ指導教員の指示にしたがってください。

### 1-3-2 おもて表紙

うち表紙 [1-2-1] と同様、

「201●年度卒業論文」の表記

論文題目（副題がある場合は改行して記載）

学生証番号

氏名

の情報を明記します。手書きはワープロによった別紙を貼り込んでもかまいません。

### 1-3-3 表紙裏

主査・副査の教員名を記したシール（12月頃から事務室で入手できる）を貼ります。ただしこの教員名は自由に選べるのではなく、10月の題名届け出を受けて決定され、11月に共同研究室前に掲出されるものを正確に記載しなければなりません [1-4を参照]。

### 1-3-4 背表紙

ファイルの背表紙にも、年度、題目、氏名を記します。

### 1-4-1 題目の届け出

「卒業論文題目届」が所定の締切以前に届け出られている必要があるのはいうまでもありませんが、指導教員との事前の打ち合わせもそれにおとらず重要です。（当然すぎて、あえて理由を記すまでもないほどですが、次項に記す主査・副査の確定作業に支障をきたす可能性のことを付記しておきます。）

### 1-4-2 主査・副査の確定

上記の届け出をうけた論文審査の主査・副査は、11月20日頃に共同研究室前の掲示板に掲出されます。論文提出時には、ファイル表紙裏のシールに正確にその教員名を記してください [1-3-3を参照]。

### 1-4-3 題目の変更

題目を届け出たあとのその変更は望ましくはありませんが、やむをえない場合のために、提出が近づいた11月末に変更を受けつける特別な期間（別途掲示）が設けられています。論文の最終的な形態について指導教員と十分相談したうえで、期間内に手続きを済ませてください。

### 1-5 提出

提出締切は厳守するように。（受け付け期間は約1週間あります。さほど余裕をもって完成はさせられないにせよ、自身で早めの締切を想定して作業を進めるくらいで、むしろちょうどよいでしょう。）交通機関の遅延、ワープロやプリンタの故障など、いかなる事由によっても締切後は受理されません。

なお、3部作成した同一の論文のうち、実際に提出・受理されるのは2部で、残りの1部は執筆者であるあなたの手元に残ることになります（\*）。1月下旬から2月中旬の試問 [1-6] に向けて自身で再度それを読み直し、また試問時にはそれを持参するようにしてください。

（\*原稿用紙を使用する場合は、原版1部とコピー2部で計3部とし、このうち原版1部とコピー1部を提出します。）

### 1-6 口頭試問

論文を提出しても、1月下旬から2月中旬に実施される口頭試問を受けないと単位認定されません（卒業できません）。試問の日時・場所は、1月中旬に共同研究室前の掲示板に掲出されます。

#### コラム——「共同研究室より」

●清心館3Fの共同研究室には、決められた時間帯にTA（ティーチング・アシスタント）が詰めるようになっています。誰もが卒業論文のハードルをクリアした経験の持ち主ですから、不明な点があれば相談してもよいでしょう。ただし、アドバイスできることがあるとしても、教員による指導に直接代わるものではありませんから、その点を留意し、また基本的にこの「葉」に当たって調べることを先行させてください。

●本文中にも記したとおり [1-3]、共同研究室には、最低限の体裁を整えたサンプルが用意されています。実際

に手にとって、不明な点の解消に役立ててください。

- 共同研究室内には数台のパソコン等が設置され、学生諸君の日々の利用に供されていますが、卒業論文の提出間近になると利用希望者で混雑するなどして、逆にさまざまな不具合を発生させかねません。そこで、12月に入ると使用規制を敷き、それら機材の利用に制限をもうけることにしています。逆に提出前には卒業論文の執筆のための専用となる学内スペースもありますから、それらを有効に利用するなどして対処してください。また、2穴パンチなどの文具はその使用規制の対象となりませんので、随時利用してかまいません。

## 2. 文献表記のきまり——もう少しカタチにこだわってみる

この第2節では、文献の引用やその書誌情報の掲出にあたっての形式的要求（統一や慣例の踏襲など）について触れます。

論文がいわゆる創作やエッセイと異なるゆえんは、何よりもそれが**先行研究の渉猟・整理・読解・批判**の作業のうえにたっている点に尽きます。

この書誌情報の表記の仕方は、研究領域ごとにそれぞれに慣例がある一方で（きわめて厳格にそれを守ることを求める領域もあればそうでない領域もあります）、それ以外に自身が依拠する方法で一貫した記述がなされていることが肝要です。

さて、複数の学問領域〔ディシプリン〕の混成体としてあるインスティテュートとしては、それら領域ごとに微妙に異なる表記法のすべてを網羅できるものではなく、あくまで最大公約数的なものを紹介しうるのみなのですが、以下では、人文系諸領域で比較的汎用的にもちいられる表記法について紹介します。

ここに記されることがらを最低限踏まえたくてで指導教員の個別のチェックを受けることを、あらかじめ推奨しておきます。

### 2-1 各領域の注と文献表記

#### 2-1-1 本文中での文献の引用

注や文献の表記については、学問分野や学会の発表媒体によって、さまざまな書き方があります。詳しくは2-2の各URLを参照し、自分のテーマ・学問分野にもっとも適切と思われる方式を選んでください。また、必ずゼミ指導教員にチェックをしてもらい、適切な表記になっているかどうか確認を怠らないようにしてください。以下に、書き方の一例を示しておきます。

〈例〉

本文中で文献を引用するときは、引用文の後に(1)のように数字を書き、本文のあとに置く「注」のページに前の数字を書いて、著者名、文献の題名、出版社、出版年を書き、その後引用ページを書きます。

また、引用文献が2人の共著の場合は、引用のたびに両著者の姓を書きます。著者が3人以上の場合は、初出の際には全著者の姓を書き、2度目以降は第1著者の姓のみ、田中他やSmith et al. のように表記します。

#### 2-2 注・文献の表記方法について、より詳しく知るために

さきほども述べたように、論文での注・文献の書き方は、さまざまです。以下、有用と思われる学術誌・学会誌の注・文献表記にかかわるURLを挙げておきます。

《歴史学分野》

[http://wwwsoc.nii.ac.jp/rekiken/journal/ronbun\\_no\\_chu.pdf](http://wwwsoc.nii.ac.jp/rekiken/journal/ronbun_no_chu.pdf)

これは日本最大の歴史研究学会である「歴史学研究会」が定めた、論文の注・文献の表記法にかんする説明です。この説明だけで一本の論文ほどの長さですが、とても詳しく注・文献の表記方法が述べられています。

《社会学分野》

<http://www.gakkai.ne.jp/jss/bulletin/guide.php>

上と同様に、日本最大の社会学研究学会である「日本社会学会」が定めた、論文執筆ガイドです。第2節・第3節に注・文献の表記法が詳しく述べられています。

《言語学分野》

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ljs2/gk/j-gkstyle2007.pdf>

日本でもっとも歴史ある言語の科学的研究の学会である「日本言語学会」の論文執筆ガイドです。PDFファイルの2～4ページに注や文献の表記法が述べられています。

## 《ヨーロッパ研究分野》

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/astig/shippitsu.pdf>

一例として、「日本イタリア学会」の執筆規定を挙げておきます。このPDFファイルの2～6ページに、注・文献の表記が詳しく説明されています。

## 《文学研究分野》

[http://www.jgg.jp/modules/organisation/index.php?content\\_id=54](http://www.jgg.jp/modules/organisation/index.php?content_id=54)

「日本独文学会」の論文執筆ガイドです。「執筆要領」の「II. 注について」で、注・文献の表記法が述べられています。

## 《美術・芸術研究分野》

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jahs2/c-kaishi-kitei.htm>

ここでは、「日本美術史學會」の論文執筆規定にかんするPDFファイルを例として示しておきます。

## 《人類学分野》

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jse/index.html>

民族学・人類学の研究組織「日本文化人類学会」の論文執筆ガイドです。「執筆細則」の第8項に文献、第9項に注の付け方が書いてあります（文献の書き方はこの葉の2-1で示した例と同じです）。

## 《思想研究分野》

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/shst/Report/index.html>

思想研究では日本最大の学会である「社会思想史学会」の論文執筆規定です。「注」という項目に、注・文献の表記法が書いてあります。

### 3 卒業論文を書く意味

さて、先行研究のうえに立って進められる考察が（いきなり後続の研究者によって参照される大論文にはならないまでも）、後輩の卒業論文執筆の見本となるには、さらに、論述が論理的整合性を有し、かつまた既存の研究に何らかの知見（初学者なりの）をもたらすものである、といった体裁・形式の問題を超えたプラスアルファの要素＝内容が求められます。

けれどもそういった問題こそは、それぞれの演習〔ゼミ〕の現場で各指導教員の責任において教授されることがら——。そこでここでは、なぜ卒業論文を書くのかという総論的内容を記して、この葉のまとめとしておきます。

\*

卒業論文は、みなさんがひとつの主題について自分の考えをまとめ、他人の評価を求めるたいへん重要な機会として課されています。論文の作成は4年間の大学生活の集大成であることはもちろんですが、文章をつうじて他者の評価を待つという、社会生活を送るうえでもっとも基本的な活動の最初の本格的な試みとなるのです。

一定の時間のなかで、自分自身の主題を見つけ、資料を集め、分析し、文章化し、繰り返し読んで手を入れ、そして完成するという過程は、各種の講読、実験、演習などによって身につけてきたはずです。卒業論文では、自分を凝縮して文章に盛り込んでゆくこの作業を、今まで以上に集中して、高い密度でおこなうことが求められます。

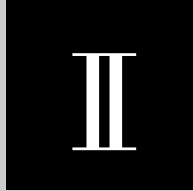
しかもその主題設定においては一定の独創性を、資料収集においては個性的な視点を、分析においては鋭さを、文章においては読み手を引き込む説得力を求められます。そしてこうした要件こそは、どのようなかたちであれ、あなたが社会に出て、自らの主張を文章をつうじておこなう上でも求められる要件にほかならないのです。

\*

最後にくりかえします——この葉に記される事柄は、インスティテュート教員が最低限必要と合意した標準的な内容ばかりですが、個別の論文の内容がここからの逸脱を要求する場合もあるかもしれませんし、逆に指導教員がすすんで特別な指示をあたえる場合もあるでしょう。

極端な話、ここにシロと書かれてあってもゼミでの討論と教員の指導から得られた結論が、クロであればクロとするぐらいに、じっさいのゼミの内容を重視して、本冊子はあくまでも補足的なものであると了解してください。





## 科目一覧と履修方法

# 1 科目一覧

## 学際プログラム全回生

| 分野         | 科目名                  | 配当回生    |
|------------|----------------------|---------|
| 小 集 団      | *人文総合科学研究入門(4)       | 1のみ(通年) |
|            | #人文総合科学基礎講読(4)       | 2のみ(通年) |
|            | #人文総合科学演習Ⅰ(4)        | 3のみ(通年) |
|            | #人文総合科学演習Ⅱ(4)        | 4(通年)   |
|            | *卒業論文(4)             | 4(通年)   |
| 講 読        | #人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ(各2)   | 2       |
|            | #人文総合科学外書講読Ⅲ・Ⅳ(各2)   | 3       |
| 言語文化       | 【比較文化論Ⅰ・Ⅱ(各2)】※1     | 1       |
|            | 比較文化講義Ⅰ・Ⅱ(各2)※2      | 1       |
|            | ヨーロッパ文化史Ⅰ・Ⅱ(各2)      | 2       |
|            | 文化と文化批判Ⅰ・Ⅱ(各2)       | 2       |
|            | 文化とポストコロニアル批評Ⅰ・Ⅱ(各2) | 2       |
|            | 社会思想史(2)             | 2       |
|            | 世界の言語(4)             | 2(通年)   |
|            | 【比較文学特論Ⅰ・Ⅱ(各2)】      | 3       |
|            | 比較文学論Ⅰ・Ⅱ(各2)※3       | 3       |
|            | ヨーロッパ文学史Ⅰ～Ⅲ(各2)      | 3       |
| 芸術表象       | 【映像原論(2)】            | 2       |
|            | 民族と文明の美術史(2)         | 1       |
|            | パフォーマンスアート論(2)       | 1       |
|            | ヨーロッパの美術・デザイン(2)     | 2       |
|            | オリエント美術史(2)          | 2       |
|            | 仏教美術史(2)             | 2       |
|            | 日本絵画史(2)             | 2       |
|            | 西洋近代美術史(2)           | 2       |
|            | 現代美術論(2)             | 2       |
|            | 美学・芸術社会学(2)          | 2       |
|            | 【映画史(2)】             | 2       |
|            | 西洋音楽史(2)             | 2       |
|            | 芸術とメディア(2)           | 3       |
|            | 【映像と社会(2)】           | 3       |
|            | 民族と芸術(2)             | 3       |
|            | 京都の美術(2)             | 3       |
|            | 音楽文化論(2)             | 3       |
| 歴史人類       | グローバルヒストリーⅠ・Ⅱ(各2)    | 1       |
|            | 文化人類学Ⅰ・Ⅱ(各2)         | 1       |
|            | 近現代の諸相(2)            | 2       |
|            | 人間と宗教(2)             | 2       |
|            | エスニシティとネーションⅠ・Ⅱ(各2)  | 2       |
|            | 社会構造と文化(2)           | 2       |
|            | アジアとテクノロジー(2)        | 2       |
|            | 人間と環境(2)             | 2       |
|            | ジェンダー・ポリティクス(2)      | 3       |
|            | ジェンダーと文化(2)          | 3       |
|            | 歴史人類学の諸問題(2)         | 3       |
|            | 地域と移動(2)             | 3       |
|            | 都市と農村(2)             | 3       |
|            | 他者認識の歴史(2)           | 3       |
|            | 歴史認識・叙述の諸問題(2)       | 3       |
|            | 民族誌の諸問題(2)           | 3       |
|            | フィールドワークⅠ・Ⅱ(各2)      | 3       |
| 史料が語る世界(2) | 3                    |         |

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. \*のついた科目は、学際プログラム学生のみが受講できます。
3. #のついた科目は、重複受講ができます。【 】のついた科目は、開講していません。
4. 下線のついた科目は、その回生しか受講できません。

- ※1 2009年度より人文科学総合講座の科目として開講されます。
- ※2 2008年度以前に「比較文化論Ⅰ」の単位を修得済みの学生は「比較文化講義Ⅰ」を受講できません。2008年度以前に「比較文化論Ⅱ」の単位を修得済みの学生は「比較文化講義Ⅱ」を受講できません。
- ※3 「比較文学特論Ⅰ」の単位を修得済みの学生は「比較文学論Ⅰ」を受講できません。「比較文学特論Ⅱ」の単位を修得済みの学生は「比較文学論Ⅱ」を受講できません。

## 2 履修方法

**必修科目**（卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目）

|   |  |            |
|---|--|------------|
| ① | 人文総合科学演習Ⅱ（4回生以上）<br>ゼミナールⅡ（テーマリサーチ）（4回生以上） | 1科目4単位選択必修 |
| ② | 卒業論文（4回生以上）                                | 4単位必修      |

**登録必修科目**（必ず登録・受講しなければならない科目）

|   |  |          |
|---|--|----------|
| ① | 人文総合科学研究入門（1回生のみ）                          | 1科目4単位   |
| ② | 人文総合科学基礎講読（2回生のみ）                          | 1科目4単位   |
| ③ | 人文総合科学外書講読Ⅰ・Ⅱ（2回生以上）                       | 2科目4単位   |
| ④ | 人文総合科学演習Ⅰ（3回生のみ）<br>ゼミナールⅠ（テーマリサーチ）（3回生のみ） | 1科目4単位選択 |

**専攻科目以外の登録必修科目**

- ・リテラシー入門（教養科目：2単位） 1回生前期
- ・外国文化講読（第一外国語）（人文科学総合講座：4単位） 3回生通年 ※2008年度以前入学生のみ

※社会人学生の皆さんは、登録必修科目はありません。ただし、条件の許す限り、上記の登録必修科目は履修してください。

受講登録方法は履修要項を参照してください。





